

カンパラ通信～ナカセロの丘から

第35回 人間界と自然界の狭間で

改めてご紹介しますと、ウガンダには国立公園が10箇所あります。ウガンダのサファリ事情については このカンパラ通信の第14回でマチソンフォールズ国立公園を紹介したのをはじめとして幾つかの回で触れてきました。そのうちサファリとなっていてゲーム・ドライブ(他種多様な生物の生息地である自然保護区を野生動物を探しゆっくりドライブすること)を楽しめるのは4箇所の国立公園となります。象やキリン、ライオンといった野生動物が自由に住んでいる広々としたサファリ・パークといっても、ウガンダの陸地面積の僅か3.7%(約7600平方km)に過ぎないと以前ご紹介しました。このように「野生の王国」と言われるアフリカにあっても野生動物は狭い狭いところに閉じ込められているのが現実です。ウガンダの場合は、近年人口増加が激しく農民は農地を求め国立公園の境界線近くまで進出し土地を開墾して畑にし、畜産をし、更にビクトリア湖で漁業を営んだり人間界と自然界が交錯しています。この様な状況のもと、人間界では野生動物に尊い人命が奪われ、農作物も被害に合い、一方、自然界も数少ないライオンが人間に毒殺されるという風にお互いに悲劇的な事件が起きているのが実状です。今回は「人間界と自然界の狭間で」と題して、人間と動物たちの相克を描いてみました。そう言えば、私が学生時代を過ごした札幌市内でもこの8月に熊が出没しニュースになりましたが、日本もある意味ウガンダと似たような状況があるのだなと思ひ返しました。

さて、今回のカンパラ通信を書くに当たって、やはり専門家の話を聞かなくては始まらないと思ひまして、ウガンダ野生生物保護庁(Uganda Wildlife Authority: UWA)のジョン・マコンボ保護局長を訪ね、じっくり話を聞かせてもらいました。



(カンパラにあるUWA本部の建物)

それでは局長とのお話を始める前に、皆さんはここまで読まれて疑問に思いませんでしたか。狭いといっても7600平方kmと言えば東京都と千葉県を合わせたくらいになります。そう考えるとこの「広い」土地が国立公園として指定されたのか、そして指定される以前に公園内に人々は住んでいなかったのでしょうか。今回はその辺の説明から入っていきたいと思います。実は、ウガンダのサファリパークが設けられるきっかけとなったのは、蠅の一種：ツェツェバエでした。これはマチソフオールズ国立公園をゲーム・ドライブした時に案内人からの説明でしたが、マコンボ局長がこれを確認してくれました。人がツェツェバエに刺されると一般に「眠り病」と言われる風土病に感染し、昼間から眠気に襲われ、意識が朦朧とし、最終的に死に至る怖い病気となるのです。昔は、マチソフオールズ国立公園やクィーンエリザベス国立公園となっている土地に合わせて30万人もの人々が村単位で住んでいたといえます。しかし、1902年から1910年の間に流行したツェツェバエによる「眠り病」のため20万人規模の住民が亡くなったそうです。飼っていた家畜も同じく犠牲になったとのことでした。そのため、当時ウガンダを統治していた英国自治政府の指導の下、病禍から生き延びた住民と健康な家畜をこれらツェツェバエによる「眠り病」の流行地域から退避させました。その結果野生動物だけがこの地に残されたのです。このようにして住民を退避させた「眠り病」流行地域が現在の国立公園となったのです。なお、それでは今ゲーム・ドライブする私達は安全なのか心配になるところですね。そこは公園当局がしっかり措置を取って心配ないようにしてくれています。ゲーム・ドライブをしていると木の枝に掛かったネットに薬剤が入れているのが見られます。これもツェツェバエ対策のひとつです。ところで人間と家畜が避難した後に残った野生動物って「眠り病」に罹らないのでしょうかね？が、素朴な疑問として残りました。この点をUWAのマコンボ保護局長に尋ねてみました。答えは「野生動物は眠り病に罹らない！」でした。自然界はやはり上手くできていますね、ツェツェバエも野生動物もウガンダの自然の中で子孫繁栄してきた野生生物ですものね。そしてもう一つ、ツェツェバエ対策のネットがあるということは旅行者は「眠り病」にかからないかという疑問も感じていました。マコンボ局長によりますと「国立公園内には今でもツェツェバエがおりますが、今存在する種は『眠り病』を招く種類ではありません。命に別状はありませんのでご心配なく。」とのことでした。「ただし、刺されるとかなり痛いのでそのための対策を執っている。」という回答でした。

さて、人間と動物の相克に話題を移します。このようにツェツェバエの繁殖が影響して動物天国となったサファリ・パークですが、過去1年半くらいかけて日刊紙で人間と野生動物が衝突した事例を追っておりましたところ、結構たくさんの報道がありました。そのうち幾つかの典型的な例を紹介します。

象その1：2017年12月

1ヶ月以上わたりカセセの町（クィーンエリザベス国立公園の西側に隣接する地方自治体）の畑の穀物に被害を与え町民の生活を不安に陥れていた象がUWAの職員と警察の手により捕まえられ、国立公園に送り返された。象は畑に、特に収穫期のトウモロコシ畑に出没し、実ったトウモロコシを食い荒らし収穫困難にしていた。UWAの職員が麻酔銃を打って象を眠らせ、クレーンでトラックに載せて公園に送り返したが、沿道の住民は拍手喝さいを浴びせた由。



（捕獲されてレスキューされる象：UWA提供）

象その2：2018年10月

土曜の朝自転車に乗っていた14歳の少女がマチソンフォールズ国立公園から逃げ出した象の鼻に捕まえられ、投げ飛ばされて負傷した。少女は病院で検査を受けた結果あばら骨2本を骨折していたとのことである。

象その3：2019年4月

午後7時30分くらいに近くの村の商店に買い物に行った妊娠中の婦人がマチソンフォールズ国立公園から逃げ出した象に襲われ死亡した。この象は前日にも近くの村に住む小学生の男の子を襲っていた。昨2018年11月以来国立公園から出没した約40頭の象により近くの農家やその家族たちが襲われ庭や家屋に被害を与えている。過去2年間で13人もの死者を出している。

ワニ：2019年3月

カンパラに隣接するビクトリア湖畔の漁村では2か所の湖岸で2か月間の間に6人の漁民がワニにより命を落としたと報告されている。村民は漁の為に湖で泳いだり、魚を獲ったり、生活用水を汲んだりできないと恐れおののいている。

ライオン：2018年4月

クィーンエリザベス国立公園内の漁村の近くで3頭の雌ライオンと8頭の子ライオンの死骸が見つかった。たぶん毒殺されたものとみられる。魚をとることを特別許可されている村が公園内にあるが、人口は増える一方魚資源は少なくなり、山羊や牛といった家畜を飼うようになる。その家畜をライオンが襲う結果、怒った村民がライオンを毒殺した可能性がある」と解説している。

豹：2019年4月

クィーンエリザベス国立公園内の漁村で自宅にいた1歳半の赤ちゃんが豹に襲われ死亡した。廃屋に隠れていた豹が地元住民に追われて逃げているうちに赤ちゃんを襲ったらしい。UWAの係官がその豹を捜索して射殺した。

カバその1：2018年10月

朝5時頃コンゴ（民）との国境付近西ナイル地域の村にカバが出現し、5人の村人が負傷した。同日午後3時半頃、出動した警察と軍がこのカバを射殺した。



（カバを捕獲した住民が喜ぶ姿の写真付き記事）

カバその2：2019年6月

ウガンダ南西部の村近くの湖で2名の村民が乗っていたボートがカバに衝突し、ふたりは溺死するという事件が起こった。村長によるとカバには畑を荒らされるし、危なくて水汲みに子供を湖にいかせることができないとのことである。

チンパンジー：2018年10月

キバレ国立公園（ウガンダ西部）に隣接する村で一頭のチンパンジーが家の敷地で遊んでいる2歳の女の子を連れ去ってしまう事件があった。母親がアラームを鳴らすと近くの住

民が集まって来てチンパンジーを追いかけたところ、チンパンジーは女の子を繁みに置き去って逃げて行った。5月には別の村で5ヶ月の赤ちゃんが群れとなって出てきたチンパンジーに連れ去られる事件があったばかりであった。

どうです。人間界と自然界の間でさまざまな事件が起こっていることを感じていただけたと思います。ただマコンボ局長が言うには、象による被害が圧倒的に多いとのことでした。私自身も、地方出張で幹線道路を走行中にマチソフオールズ国立公園の出口に近い所の幹線道路反対車線を象が歩いているのを目撃したことがあります。交通量が多い幹線道路を超えて歩いて渡る象がいるなんて想像できませんでした。象に注意というような交通標識があったのも大袈裟ではなかった訳です。因みに3年前にはあったこの交通標識はもう今はありません。もうひとつ、同じ幹線道路でナイル川を渡る辺りにやはり野生のヒヒが多数出てきて餌をねだっています。ある時私の乗っている乗用車に飛び乗ってきました。何とか降ろそうとしましたが、ヒヒが人間を怖がって降ろすのに一苦労しました。ただ、このように野生の動物に遭遇することはたとえウガンダにおいても一部の地域に限られ、まだまだ珍しいことです。



(筆者が搭乗する車両のボンネットに乗った野生のヒヒ)

こうした事件に対してウガンダ政府も手をこまねているわけではありません。マコンボ局長によれば、主管官庁でありますUWAを中心にさまざまな方策をとっています。彼の説明によれば、人間と自然動物が共生する上で一番重要なことは、国立公園の近隣住民に野生生物の保護の重要性を理解してもらうこと、そして、その上で現実的な方策を保護庁と近隣住民がそれぞれ執っていくということでした。国立公園から出て来た野生動物は付近の住民の農作物や家畜に被害を及ぼし、人命を危険にまで晒します。他方、住民が飼っている牛その他の家畜が水や草を捜して国立公園に入ってしまうケースもあります。そういう家畜は罰金の支払いの対象になっています。ですのでお互いが他方の生活圏を侵さな

いようにする必要があるとのことでした。ゴリラやチンパンジーといった類人猿の生活の場を奪ってしまうので薪のためにむやみに国立公園内での森林の伐採を行わないことをUWAは奨励しています。また、国立公園との境界付近では動物が嫌うトウガラシ類を作付けしたり養蜂業を営むことで象やバッファローといった動物を人間界に近づけないように工夫しています。国立公園を管理するUWAは、国立公園の入場料等からの収入の20%を割いて近隣の村の開発のために寄付しています。また、UWAでは、国立公園の近隣に居住する住民の訴えに耳を傾けて野生動物が農地に入って被害を与えた場合にはその損害を補償する法改正を最近実現したばかりで、まもなく施行されるそうです。そして収入の2%をこの補償に充てるための基金をUWAでは作ることにしています。



(国立公園の境界の大規模溝：UWA提供)



(建設中の電気柵：UWA提供)

より即効的な対策として、UWAが既にマチソフォールズ国立公園では象が園外に頻繁に出て来る地点を特定して幅3m深さ3mの大規模な溝を掘削しています。住民が自己対策で作れるような浅い溝では象が簡単に土を運んで埋めてしまうということです。象もなかなかやりますね。本年7月現在で1.6kmの長さの溝を完成させましたが、その地域では新たな被害が出ていないと言いますから、効果絶大ですね。更に本格的なものとしては、UWAは、昨年10月クィーンエリザベス国立公園の東側の境界外にやはり象やバッファローといった大型動物が出没する辺りに90cmくらいの高さの電気柵を建設する工事を開始し、これが最近完成し、8月1日にムセベニ大統領の出席の下で完成式典が催されました。電気は太陽光エネルギーで供給され電圧は9千ボルトまで高められますが電流の量を抑えることで大型動物がショックを感じる程度にとどめ、殺さない配慮をしているとのことでした。国立公園内に不法侵入しようとする人間にとっての配慮でもあるかもしれません。ウガンダ政府はゆくゆくはこの電気柵を50kmまで延長させたいと考えています。しかし、その経費も考慮して電気柵を建てるのは当面大型動物が公園外に出ていきがちなところ限定して設置する計画です。なお、1km当たりの電気柵の建設費は1,400米ドルにのぼるとのことです。他の国の経験から不安なことは、今度は人間がこの電気柵を壊

して園内に入り、薪のために木を伐採したり、水を汲んだり、肉を手に入れるために動物を殺すことだそうです。困ったものですね。UWAでは、まだアイデア段階ですが、なんとドローンを飛ばして大型動物が公園の境界に近づくのを見つけると、彼らが嫌いな蜂の音を出してその場から追い払うようにすることも考えているそうです。

ウガンダ西部では北から南に走る大地溝帯と呼ばれる地域に本格的な量の石油が埋蔵されていることが2006年に判明し、現在北西部のアルバート湖周辺で商業生産に向けた動きが国によって進んでいます。その一部もマチソフオールズ国立公園と接する地域となっており開発と自然の両立が議論となっています。そもそも大地溝帯はマチソフオールズ国立公園からキバレ国立公園、クィーンエリザベス国立公園を含む地域を包含しているのです。ですから、石油が埋蔵されていると言われる地域はこれら国立公園の所在地と重なるのもむべなるかなです。現にマチソフオールズ国立公園の中でも野生動物の大多数が暮らすナイル川を渡った北部公園地域の地下にも石油の存在が確認されています。

ウガンダ政府は本2019年に入って5地域の石油井の探査の権利を国際的に競争入札にかけています。それには、クィーンエリザベス国立公園や絶滅危惧種であるマウンテンゴリラが生息するブウィンディ国立公園とも接するような地域も対象となっています。今後、大規模な石油開発と自然保護のどちらを優先するかで国家レベルで、いや国際レベルで大議論に発展していく日が来るのもそう遠くないかもしれません。

(了)